

樹木とその葉
酒の讃と苦笑

若山牧水



それほどに うまさかとひとの同いたらば 何と答へむこの酒の味

真実、菓子好の人が菓子を、渴いた人が水を、口にした時ほどの
うまさをば酒は持っていないかも知れない。一度口にふくんで咽喉を
通す。その後に残る一種の余香余韻が酒のありがたさである。
単なる味覚のみのうまさではない。

無論口であじわううまさも あるにはあるが、酒は更に心で
噛みしめる味を持って居る。あの「酔う」というのは心が次第に
酒の味をあじわってゆく状態をいうのだと私はおもう。斯の酒の
うまみは単に味覚を与えるだけでなく、直ちに心の營養となつてゆく。
乾いていた心はうるおい、弱っていた心は蘇り、散らばっていた
心は次第に一つに纏つて来る。

私は独りして飲むことを愛する。

かの宴会などという場合は多くただ酒は利用せられているのみで、
酒そのものを味わい楽しむということは出来難い。

白玉の歯にしみとほる 秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり
酒飲めば 心なごみて なみだのみ かなしく頬を流るるは何ぞ
かんがへて 飲みはじめたる 一合の 二合の酒の 夏のゆふぐれ
われとわが悩める魂の 黒髪を撫づるとごとく 酒は飲むなり
酒飲めば 涙ながるる ならはしの それも独りの 時にかぎれり

然し、心の合うた友だちなどと相会うて 杯を挙ぐる時の心持も
亦た難有いものである。

いざいざと友に盃すすめつつ泣かまほしかり酔はむぞ今夜
語らむにあまり久しく別れぬし我等なりけりいざ酒酌まむ
汝が顔の酔ひしよろしみ飲め飲めと強ふるこの酒などかは飲まぬ

朝の酒の味はまた格別のものであるが、これは然し我等浪人者の、
時間にも為事の上にもさまでに厳しい制限の無い者にのみ与えられた
余徳であるか知れぬ。雨、雪など、庭の草木をうるおしている朝は
ひとしおである。

時とおき老樹のしづく落つるごと静けき酒は朝にこそあれ

普通は晩酌を称うるが、これはともすれば習慣的になりがちで、
味は薄い。私は寧ろ深夜の独酌を愛する。

ひとと戸をさし固むべき時の来て夜半を楽しくとりいだす酒
夜為事の後の机に置いて酌ぐウヰスキーのコップに蚊を入るなかれ
疲れ果て眠りかねつつ夜半に酌ぐこのウヰスキーは鼻を焼くなり
鉄瓶のふちに枕しぬむたげに徳利かたむくいざわれも寝む

酔い果てては世に憎きもの一もなしほとほと我もまたありやなし

一刻も自分を忘るる事の出来ぬ自己主義の、延いて其処から出た
現実主義物質主義に凝り固まっている阿米利加に禁酒令の布かれたは
故ある哉である。

洋酒日本酒、とりどりに味を持って居るが、本統におちついて
飲むには日本酒がよい。

サテ、此処まで書いて来るともう与えられた行数が尽きた。

初め、酒の讃を書けという手紙を見た時、我知らず私は苦笑した。
なぜ苦笑したか。

要するに私など、自分の好むものにいつ知らず救われ難く溺れていた観がある。朝飯昼飯の膳にウヰスキーかビールを、夕飯の膳にはまた改めていわゆる晩酌を、という風に酒びたりになっている者に果して真実の酒の讃が書けるものだろうか。

いま一つ苦笑して 苦笑の歌 数首を書きつけ この稿を終る。
その一。

一杯を思ひきりかねし 酒ゆゑに けふも朝より 酔ひ暮したり
なにもものにか媚びてをらねばならぬ 如き寂しさ故に 飲めるならじか
酔ひぬれば さめゆく時の寂しさに 追はれ 追はれて 飲めるならじか

その二。これは五六年前、腎臓を病み 医者より絶対の禁酒を
命ぜられた時の作。

酒やめて かはりに何か 楽しめといふ 医者が 面に 鼻あぐらかけり
彼しかも いのち惜しきか かしこみて 酒をやめむと 下思ふらしき
癖にこそ 酒は飲むなれ この癖と やめむ易しと 妻宣らすなり
宣りたまふ御言かしこし さもあれと やめむとは思へ 酒やめがたし
酒やめむそれはともあれ 永き日の ゆふぐれごろに ならば何とせむ
朝酒はやめむ 昼酒せんもなし ゆふがたばかり 少し飲ましめ
酒無しに 喰ふべくもあらぬものとのみ 思へりし 鯛を飯のさいに 喰ふ

おろか者^{もの}に たのしみ^{とほ}乏^{おと}しかる それの^{ひと}一つを取^とり落^{おと}したれ
うまきもの 心^{こころ}に並^{なら}べ それこれと くらべ廻^{まわ}せど酒^{さけ}に如^しかめや
人^{ひと}の世^よに たのしみ^{おほ}多^{おほ}し 然^{しか}れども 酒^{さけ}なしにして なにのたのしみ

〈完〉



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

Podcast ののラジオ 好評配信中！

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでもいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 著者名

『樹木とその葉 酒の讃と苦笑』 Podcast 版

発行日 令和 6 年 4 月 27 日

著 者 著者名

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
旧仮名遣いを現代仮名遣いに、旧字を新字に直しています。
ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『若山牧水全集 第七巻』雄鶏社（1958 年）

初 出 大正 14（1925）？年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000162/card2210.html>

